長詩

おやじよ

※※※ 竜野於年吾 ※※※

昭和二十年九月十四日
まだ残暑のきびしかった真夜中のこと

「第二にゆくなら、おらアくにさん帰るけんね」
ぽつんとひとこと　おやじがいうた
首切り撤回
ホッパー決戦
去るも地獄、残るも地獄……のはげしい闘い
幼い時からの友だちが
二人、三人と第二組合へ走っていった
さびしかった俺の心はゆらいでいた
その胸の中を見すかすように
俺のコップに二十度をつぎながら
ぽつんとひとこと　はっきりいうた
昭和三十五年の四月　第二組合結成後間もない
或る日の夕方のこと

「よかったね」
ぽつんとひとこと　おやじがいうた
命からがら逃げのびて
やっとあがってきた俺を
確かめるかのようなまなざしで
じっと見つめてぽつんというた
黙って神棚に灯明をささげて
拍手二つ打ったような……
昭和三十八年十一月九日夜なかの三時
俺のしあわせを奪った憎い憎いあの真夜中

「……」
ぽつんとひとこと　おやじはもういわない
黒いリボンで囲まれた
四角い額のその中で
三十六年間も汗と泡で働いて
古か棹取りさんとひとからいわれながら
黙々と三井独占資本に奉仕してきた　おやじ
今生きているならぽつんとひとこと
いうだろうなア——
「会社は慮ラン体ば、もとんごつしてもどせ」

おやじよ
今夜は焼酎を供えてやるから
いっしょにいっぱいのもうじゃなっか
昭和四十六年三月十日はもと陸軍記念日
無口だったおやじをしのぶことしきり

「おい、もう駄目ぞ」
ぽつんとひとこと　おやじがいうた
さようなら…をいっているような目で
じっと俺を見あげていた
やがてその目を静かに閉じると
再びあけることもなく　おやじは
七十二年の生涯を終えていった
昭和四十一年八月二十一日午後五時二十分の事

「じゃんむりでん、帰ってこんならでけんジ」
ぽつんとひとこと　おやじがいうた
呑みもきらずにとっていた
たったひとつの楽しみの配給酒を
俺の海軍大隊の日のために
湯のみについでくれたその合成酒
ぐっとのみながら大きくうなずき
「うん」、とこたえた俺たった
昭和十八年三月三十一日
また肌寒かった夜のこと

「帰ってきたか」
ぽつんとひとこと　おやじがいうた
米三升に乾パン五袋
毛布一枚に靴が一足
命をかけた二年間の報酬を背中に負うて
「ただいま」、といって帰ってきた俺を
じっと見つめながらぽつんというた
手巻きの〝のぞみ〟に火をつけて
ただ黙って指にはさんでくれたっけ

×

三川指導部十一分会〝いのち〟（NO・四四、三月十五日発行）から紹介したもの

人間らしく生きよう

春闘考

宮浦　三島徳祐

凍てついた氷もようやくとけて重い冬衣を脱ぎすて、明るい自然にたわむれ、花よ蝶よと浮かれ気分に浸っている中に、なんとなく春闘がはじまり、なんとなく終わっていく。

まことに〝春蕩〟の名に相応しい〝春闘〟をくり返すこと、ここ数年。

よそは五ケタで俺たちア四ケタの下か——と自嘲とも、諦めともつかぬ怒りを焼酎の酔いに発散させて、空しく天を仰ぐ。

その春闘が、今年もまたおとずれた。

過去十年間の鉄鋼・電機・造船の賃上げ総額は、平均四万七百円で、炭労は二万三千八百円「世間なみに取るべきものも取らずに耐えしのんでいるうちに、労働条件は大きく他産業から引き離された」——山本炭労委員長談。

謙譲の美徳？の極地……。誰のために、何のために？

今次炭労議案書はいう——「賃金をはじめとする諸要求の闘いが実は、石炭政策そのものである」として、「本春闘で、われわれが企業に対して要求している賃上げその他について、社会的水準を確保するに必要な政策的裏付けを、対政府要求として行なう」と。

政策的裏付けがあれば、奴隷的炭鉱賃金が、社会的水準に引きあげられるとでもいうのか。

芦別炭鉱の青年労働者は叫ぶ——「アベック闘争はやめてほしい。よそに恥しい。国有化闘争、政転闘争、みんなそうだ。金をとったというが、俺たちには役にたたん。会社を太らせただけだ」。

「閉山を恐れずなんて、実際に恐れているのは炭労や組合ではないのか。恐れているから、闘いは中途半端。全組合員に書かせた退職届けは、どこかの物置に眠っているのではないか」。

辛辣である。だがそれは、単なる批判ではない。生活を追いつめられた者の悲憤の絶叫であろう。

にもかかわらず議案書は、くり返し執ようなまでに〝闘う内部体制の不備〟をうたいあげ、〝本春蕩〟の匂いをただよわせている。

芦別炭鉱の若者はいう——「炭鉱の請負給は撤廃させるべきだ。ソ連の、アメリカの炭鉱は最高の賃金だ。われわれは賃金レベルをあげて、請負給の廃止にふみきるようにすべきだ」。

オヤジが資本家からしぼりとられるのを見て育った炭鉱労働者の若者が、人間らしく生きる、人間の権利に目覚めて、資本に対して投げつけたこの人間宣言の雄叫びを、炭労執行部・組合幹部は真摯に胸に受けとめるべきであろう。

労働者がつくっている、労働者の〝炭労〟であるために。

〝春闘〟を〝春蕩〟たらしめないために。

×

宮浦七分会の〝つなぎ〟（三月二十二日発行）から。

三池の教訓—
もち帰れてうれしい

武石京子さん（北海道）の便り

三池に学ぶ集会に参加してから早や二週間が過ぎさり、旭川地域まなぶ友の会においての報告会を終えたところです。

私たちはこの報告会で、CO闘争——生命を守る闘いが人間性を追及し、人間らしく生きることをのぞむわれわれ労働者にとって、いかに重要であるかを訴えました。

生命を守る闘い——頭の中では理解したつもりでいました。

私の身のまわりで起きている、多くの労働災害の多くの原因が、生産第一主義、資本の利潤追求の結果であることも、わかっていました。しかしCO患者の実態を、三池の方々とお会いして聞き、宮島さんをひと目見て、それがあまりに残酷なものだということを知り、改めて独占資本を断じて許すことのできない怒りが、私の体の中を走るのでした。

学習不足の私ですから、三日間でまなび得たことをどれだけ発揮できるかわかりませんが、あせらず仲間づくりをし、行動して行きます。私自身が悔ゆることのない人生をおくるためにも。

三池教訓——私のあまさを指摘してくれました。「もっと厳しくなれ」と。本当に、ありがとうございました。大きな教訓をもち帰ることができたことをうれしく思います。

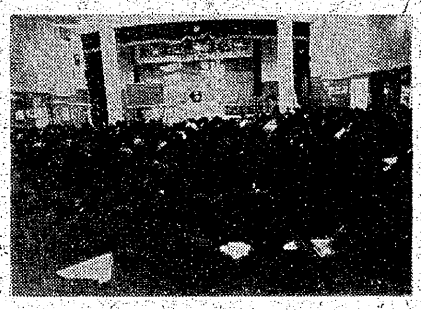
旭川は毎日マイナス二十度。寒波が続き、私たちの行動を鈍らせてくれます。しかし統一地方選挙のため、これから毎日がんばって行くのです。

三池の皆さんカゼをひかれぬよう、体に気をつけて前進し、後輩のためご指導下さい。

ありがとうございました。お礼にかえさせていただきます。

×

武石京子さんのお住所は「北海道旭川市春光町二区七条」です。ともにがんばって行きましょう。



まだ、まぶたに焼きついているまなぶ総括集会

三池からも送ろう

第八回「総評文学賞」作品募集

総評は今年も左記要領で「総評文学賞」作品を募集することになった。

「総評文学賞」募集は今年で八回目を迎えるが、労働者文学の方向をうちたてるとともに、民主文学の創造と発展に大きな役割を果している。

募集要領は次のとおり。

▽種目＝短編小説と詩の部に分け、形式および取材対象は自由。

▽応募作品の制限＝作品は書下ろし、または昭和四五年四月一日から昭和四六年五月末までの間に各単産のサークル誌その他に発表されたもの（入選、落選を問わず）。

▽枚数＝短編小説は五〇枚前後（四〇〇字詰原稿用紙）。詩は一〇〇行以内。

▽応募資格＝総評、中立労連、地評、地区労加盟の組合員とする。

▽締切り＝昭和四六年五月末日（当日消印有効）。

▽入選発表＝総評定期大会で行なう。

▽審査委員＝小説の部（野間宏、佐田稲子、久保田正文）詩の部（小野十三郎）。

▽賞金＝小説の部（入選一編一〇万円、佳作三編解三万円）詩の部（入選一編一万円、佳作三編各三千円）。

▽注意事項＝(1)応募作品の封筒に「文学賞応募作品」と朱書のこと(2)応募者は上部単産名、単組名、職場名、氏名（ふりがな）年令、住所、略歴等を明記すること(3)応募作品は一切返却しない(4)入選作品の版権は総評が取得する。

▽送付先＝東京都港区芝公園八の二　総評情宣局第八回総評文学賞係。

はかたにわか

甚兵衛さん　今年の冬どま、東京じゃ野菜のバカ高値で、大根な一本二百円。鄙民な、おかげでキュウリキュウリいいよったばなバイ。

田吾作さん　国政もバッテン、県政もどうろこうろじゃが。知事さんの名前だけは光っとらすバッテン（現知事の名は亀井光という）今ンでたるきまなら、公害スモッグで先どま見えはせん。

甚兵衛さん　そこたんも田吾作どん。よーと考えて見なはれ。公害も、大根の高かつも、県政という畑がやせとるからじゃなかつかね。

田吾作さん　じゃから俺は叫びよっと——「みんなで県の粟田ばたがや（多賀谷革新福岡県知事候補）せエたがやせエ」。

×

宮浦七分会の江口兼利さんの創作。（同分会の〝つなぎ〟＝三月二十二日発行＝から）

三興燃料さんありがとう

千二百名の離職者ばかりで企業組合を組織している「三興燃料」は、この度「組合員皆さん方のご協力により大過なく運営していることに感謝する」として金十万円をCOカンパとしていただきました。厚くお礼申し上げるとともに今後とも企業の発展を祈ります。